

本質直観とはなにか？

山竹 伸二

なぜ本質直観は生じるのか？

フッサール現象学の重要概念である「本質直観」とは、ごく簡単に言えば「意味の直観」であり、ある対象に接したとき、その意味が何の推論も介さずに意識されることである。「机」「パソコン」「猫」「自動車」「山」「雨」など、私たちは様々な対象を目にしたとき、瞬時にそれが何であるのかを認識できる。それらの対象の意味が直観されるからである。しかもこの直観された意味には、他者と共通了解し得るような一般性がある。

では、一体なぜこのような意味の直観が生じるのであろうか？

コップを一目見て「あ、コップだ！」と思い、それと同時に「何かを飲むための器」という意味が直観されるとしよう。この直観が生じるのは、他の人がそれと類似した対象を「コップ」と呼び、それで何かを飲んでいゝのを何度も見た経験があるからだ。こうした経験の繰り返しによって、もはや他者がいない場所さえ、それと類似した形態の対象を即座に「コップ」だと確信するようになる。つまり、他者とのコミュニケーションの中で獲得した知識が身体化され、直観的に把握できるようになるのだ。

このように、本質直観にはすでに他者との関係性が織り込まれている。だからこそ、直観された意味には一般性があり、他者と共通了解できる可能性があるのだ。

ところで、コップの一般的な意味（「何かを飲むための器」）は、反復される経験の中で身体化され、コップを見た瞬間に直観されるのだとしても、一方でコップは私の欲望や関心に相関したその都度の意味をも示している。というより、ハイデガーによれば、日常生活の中では第一にそのような意味（「このための」という用具性）こそが際立ってくる。

たとえば誰かと口論をして腹を立てているとき、ふと水の入ったコップが目に入ると、それは「相手に水をぶちまけるための道具」あるいは「相手を傷つけるための武器」という意味を帯びて認知されるだろう。

大抵の場合、そうした意味を自覚する以前に、ほとんど無自覚のうちにコップの水を相手にぶちまけているにちがいない。ハッと気づくと、すでに相手はびしょ濡れで、鬼のような形相をしていることも十分あり得る。だが、自覚していようとそうでなかつたら、コップは「相手を懲らしめたい」「思い知らせてやりたい」という欲望に忠じて、そのような道具としての意味を帯びて現われていたのである。

このように、事物はその都度の様々な状況に忠じて、異なった意味をもなつて現われる。それは私の個人的な欲望・関心に相関して現われた意味であり、他者と共通了解された意味ではないので、一般性はない。このようなコップの意味はその都度の状況によって変化するものであり、一般的に誰もがあたり前だと思っているような意味とは違うのである。

この場合、コップの共通了解された意味（「何かを飲むための器」）も了解されているのだが、それは特に意識されない。日常生活の中では、まず欲望や関心に相関した意味が前面に現われ、共通了解された一般的な意味は後景に退いている。無論、私の喉が渴いているときにコップを目にした状況では、「何かを飲むための器」という意味が前面に現われる。この意味は過去において他者と共通了解され、コップの本来の意味（コ

ツプ自体に属する意味)として捉えられているため、普段は自明視され、意識されないのである。

竹田青嗣の『言語的思考へ』によれば、言語行為とは「一般意味」を利用した各自的な意(企投的意思)の投げかけあいであり、「企投的意思」の集合的痕跡(積み重なり)として「一般意味」が成り立っている。この考え方は「言語」の本質を鋭く捉えており、さまざまな応用が可能である。たとえば、共通了解された一般的な意味(≡本質)も、欲望相関的な意味の集合的痕跡として捉えることができる。使用頻度の高い企投的意思の集合的痕跡が、一般意味として共通了解され、本質として捉えられるようになる、と言ってもよい。

言うまでもなく、使用頻度の高い意味ほど、その都度、周囲の共通了解も得られ、次第に自明視されるようになりやすい。コップを武器として使えば周囲は驚くはずだが、何かを飲むために使えば、誰もが当然だという態度を示すだろう。それは、すでにコップの一般意味として「何かを飲むための器」が共通了解されているからだ。そうした周囲の態度ゆえに、そして実際に何かを飲む上で都合がよいために、私たちはコップをそのように使う機会が増えてゆく。だからこそ、「何かを飲むための器」が共通了解されるコップの意味(本質)として沈殿し、その意味はコップを目にする度に賦活され、直観として捉えられるようになるのだ。

概念の本質直観から本質観取へ

〈事物〉の本質直観と同様、私たちは、すでに何度も使ったことのある言葉、抽象的な(概念)を見聞きした場合にも、その意味を直観している。例えば「三角形」や「自然」「世界」といった言葉を聴けば、即座にある意味が直観されるだろう。これもやはり、他者とのコミュニケーション

シヨンのなかで、定義された意味での使用が繰り返され、共通了解によって自明視されるようになったものだ。

日常で使用される抽象概念は、一般的に定義された意味をベースにして、他者との関わりの中で使用され、その都度の文脈に応じた意味(企投的意思)を与えられる。そして、使用頻度の高い企投的意思の集合的痕跡が、一般意味として沈殿し、その概念を見聞きする度に直観されるようになるのだ。

しかし、抽象概念のなかでも、「欲望」「感情」「死」「嫉妬」「不安」「自由」など、人間のあり方や体験に関わる概念の場合、直観される意味にズレが生じやすい。たとえば「自由」の本質とは何かを話し合えば、多かれ少なかれ意見の違いが生じ、共感だけでなく、批判や反論も飛び出し、なかなか收拾がつかないかもしれない。それは、こうした概念に何を感じるかは、人それぞれの経験が深く関わっているからだ。

「自由」の概念にしても、誰かに服従を強いられてきた人、規則や命令で縛られてきた人にとって、それは「拘束からの解放」という意味が強くなり、この言葉を聴けば、まず即座にこうした意味が直観されるだろう。逆に、好きなように行動することを許された環境で育った場合、何をすべきなのかを決めることが重要になり、自由という言葉は、「選択における葛藤や苦悩」を連想させるかもしれない。このように、「自由」について直観された意味には、自分の経験から生じる主観的な観点が織り込まれている。

無論、「自由とは何か」という問いに、絶対に正しい答はないし、そのような真理は存在しない。しかし、「自由」という言葉は、数多くの人々が様々な状況で使ってきており、その意味にはある程度のばらつきがあるとしても、その微妙な意味の違いを振り払えば、そこには必ず他者と

共通に了解できるような意味があるはずだ。そうでなければ、誰もが「自由」という言葉をごく自然に使ってコミュニケーションを行なうことなどできないだろう。したがって、このような人間のあり方に関わる概念もまた、必ず誰もが共通了解し得るような意味が含まれている。

現象学における本質観取は、主としてこうした抽象概念を対象としている。その意味があまり固定されておらず、多様な解釈を許容するような概念、それでいて、よく考えれば必ず誰もが共通了解し得るような意味を含んでいる概念こそ、本質観取をする意味がある。

やり方としては、まず、客観的に正しい意味（真理）がある、という先入見を捨て、直観された意味から考えてみなければならぬ。その言葉がどのような意味で使われ、どのような経験に当てはまるのか。そして、そこに共通するものは何なのかを、何度も繰り返し考えてみる。すると、最初はその言葉が使われる文脈に応じて、多様な意味が現われているのだが、それらが比較されることで、共通する核心的な意味が見えてくる。その意味を誰もが納得し得るような言葉で言い当てることができれば、それがその概念の本質と言えるのだ。

もともと最初に直観されていた意味も、自分の関わってきた人間関係の中で共通了解され、沈殿して自明視されていた意味なのだから、本質観取は共通了解の再確認のプロセスを含んでいる。ただ、自分が直観していた意味は、親や友人、同級生、サークルの仲間など、限定された人間関係における共通了解がベースになっているので、ある程度の偏りは避けられない。これに対して本質観取は、自分が関わってきた人間関係に限定されない、誰もが共通了解し得るような意味を考える作業なのである。

本質直観の歪みと現実感の喪失

本質直観の形成に他者との関係が深く関わっているなら、幼少期からの他者関係、特に親子関係に歪みがあれば、直観される意味にも歪みが生じてしまうことになる。一般性のない意味を受け取るようになったり、ぼんやりとしか意味を受け取れなかったり、経験する意味の世界に大きな支障が生じてしまうかもしれない。場合によっては、現実感が失われてしまうほど、重い心の病に罹る可能性もあるだろう。

そもそも私たちの現実感とは、事物の实在性に対する信憑と不可分な関係にある。たとえば目の前にコップが見えていても、それはコップが実在することを証明してはいない。しかし、コップが私に見えていること、ありありとそこにあるという現実感、それ自体は決して疑えない。この不可疑性こそが、コップがそこにあることを確信させている。

この場合、「コップが見えている」という現実感には、「これはコップだ、何かを飲むためのものだ」という意味の直観がともなっているのだが、普段は特に意識されることがない。コップを他者とともに「コップ」と呼び、それを飲むための器として繰り返し使ってきたからこそ、コップⅡ「何かを飲むための器」という本質直観が生じるようになったのであり、その意味は共通了解の経験を繰り返してきたことで、自明視されるようになっていく。このような本質直観における自明性こそ、コップの实在性への信憑を支え、現実感を生み出しているのである。

したがって、こうした他者とのコミュニケーションに支障があれば、本質直観される意味は身体化されず、現実感が揺らいでしまう可能性がある。

ブランケンブルクは『自明性の喪失』において、統合失調症の患者アンナの、世界に対してなじんだ感じがなく、親しさ（親和性）が感

じられない、という訴えに注目している。普通、多くのものごとが意味の関連性の中で瞬時に把握され、特に問題のないものとして把握されているかぎり、私たちの生活は安心感のある自明な世界として感じられる。ところがアンナの場合、この自明性が失われ、世界は不安な様相を帯びて立ち現われている。それは、意味の関連性によって織り上げられた世界にはころびが生じ、現実感が薄れている状態と言つてよい。

では、一体なぜ自明性が失われ、現実感が薄らいでしまうのだろうか？ ひとつ考えられるのは、関係性の歪み、破綻である。意味の自明性が失われることは、本質直観がうまく働いていない、ということでもあり、本質直観の条件であるはずの他者関係（コミュニケーション）に歪みがあった可能性もある。たとえば、一貫性のない親の言動によって親の心が理解できなくなり、共通了解の失敗を繰り返すと、他者との共通了解に確信が持てなくなり、共通了解された意味の身体化、直観化に支障が生じてしまう。辞書的な意味は頭で理解していても、共通了解という基盤を欠いているため、あたり前（自明）だとは感じられず、安心感が得られないのだ。

現実感の喪失ともなれば、心の病としてもかなり重い状態と言えるが、そこまでいかなくとも、幼少期からの他者関係の問題があれば、さまざまな概念の本質直観にも支障が生じ、歪んだ思考を生み出す可能性は少なくない。すると、大人になってからも他者との関係に齟齬が生じやすくなり、さまざまな困難、苦悩を抱え込むことになるのである。

本質直観を本質観取する

以上のように、私たちが日常の中で知らず知らずのうちにやっている本質直観には、他者との関係性が織り込まれている。本質直観される意

味は、最も経験頻度の高い欲望相関的な意味の痕跡であり、普通、他者との共通了解を介した一般性を持つている。他者と共有された意味だからこそ、次第に自明視されるようになり、直観として捉えられるようになるのだ。

事物の本質直観の場合、すでに定義された意味がある物に関しては、他者との間に齟齬が生じることはほとんどないだろう。その意味は最初から一般性があるがゆえに、絶えずお互いの言動の中で共通了解され、自明視されていくからだ。その都度の状況に応じて現われる意味（欲望相関的な意味）が異なるとしても、それと同時に、このような一般的意味も直観されている。

一方、「欲望」「感情」「死」「嫉妬」「不安」「自由」など、人間のあり方に関わる概念の本質直観は、一応は辞書的な意味があるとしても、個人の経験によって捉え方が多様であり得るため、他者との間でも違いが際立つてくることは珍しくない。しかし、これらは人間であれば誰もが経験することであり、必ず共通了解が可能な意味を有している。それを取り出すことが、現象学の思考法である本質観取の役割なのである。

そもそも、この「本質直観」に関する論考自体、現象学的な試論と言えるかもしれない。本質直観は誰もが日常的に経験していることであり、そうである以上、必ず誰もが共通了解し得るような本質を取り出すことができる。つまり、本質観取が可能なのである。

無論、「本質直観」は一般の人の知らない哲学専門用語であり、「自由」や「感情」のような日常語の場合のように、その言葉自体から得られる意味の直観や、その言葉の使い方を振り返る、というようなやり方は使えない。しかし、本質直観を誰もが経験する「意味の直観」として捉え直し、こうした「意味の直観」に関する経験について、多くの人が納得

できるような意味に本質を見出すことは、決して不可能なことではないはずだ。

ここで私が試みた論考は、まだ十分に練られた本質観取とは言えない。しかし、本質直観とは何か、その本質が明らかになれば、前述したような精神病理の本質を解明し、適切な治療法を考えることができるかもしれない。また、本質観取という思考方法の原理を見つめ直す上でも、人間という存在の本質を考えていく上でも、きつと役に立つだろう。だが、この続きはまたの機会に論じたい。

参考文献

- フッサール、E『イデーニ I・I』渡辺二郎訳、みすず書房、一九七九年。
- ハイデガー、M『存在と時間 上』細谷貞雄訳、筑摩書房、一九九四年。
- 竹田青嗣『言語的思考へ』径書房、二〇〇一年。
- ブランケンブルク、W『自明性の喪失』木村敏他共訳、みすず書房、一九七八年。